

## 「主体的に学び，考える児童の育成」

### ～アクティブ・ラーニングの視点にたった算数科における授業改善を通して～

#### I 研究内容

##### 1 研究の具体的内容と方法

- (1) 算数科の特性を生かした「主体的・対話的・深い学び」実現のための理論研究
- (2) 授業案の作成，検討及び授業実施  
ワークショップ型，授業研究会（2回）
- (3) 一人一実践の取り組み
- (4) Q-U調査の実施2回（5月・10月）とK13法による結果分析
- (5) 家庭学習と授業を有機的に結びつける取組

##### 2 研究実践

- (1) 「主体的・対話的で深い学びにつながる算数科における授業づくり」について指導主事を招聘しての学習会（6月26日）

峡東教育事務所指導主事

三森 公仁先生

- (2) アクティブ・ラーニングの視点に立った授業実践とワークショップ型校内研究

##### ア 低・中学年ブロック授業研究（11月 1日）

4学年 算数科「広さを調べよう」

清水 新果教諭

指導助言 山梨県義務教育課指導主事

笠井さゆり先生

峡東教育事務所指導主事

三森 公仁先生

##### イ 高学年ブロック授業研究（11月 8日）

5学年 算数科「比べ方を考えよう」

上矢 元気教諭

指導助言 甲州市教育委員会指導主事

那須 丈彦先生

##### ウ 一人一実践

1学年 算数 「たしざん」

内田 厚子教諭

2学年 算数 「九九を作ろう」

檜垣 貴子教諭

3学年 算数 「三角形を調べよう」

鈴木百合子教諭

6学年 算数 「速さの表し方を考えよう」

小宮山公仁教諭

ひまわり学級 算数 「まるい形を調べよう」

大島めぐみ教諭

たんぼぼ学級 算数 「分数のかけ算を考えよう」

渡邊 皓 教諭

- (3) Q-U結果を分析し，アタックシートを活用した学級集団づくり

一人一人の実態に即した支援や指導を進め，教育活動を展開することができれば，本研究の目標や願いにより確実に迫ることができるものと考え，Q-Uを実施（5月・10月）した。そして，ブロックごとにK13法による分析を行い，各学級や児童の実態を把握し，それぞれが抱える課題について職員全体で共通理解を図り，的確な対応策を出し合い支援につなげた。

#### (4) 家庭学習の取組

- ・自主学習ノートを掲示したり、見合う機会を設定し、上級生や友だちの取組を学べる機会を意図的に設けた。
- ・各学年において「家庭学習の手引き」「家庭教育・子育てQ&A」を活用した効果的な家庭学習の提案を行なった。

## II 成果と課題

### 1 成果

- ・算数科におけるアクティブラーニングの視点にたつて授業改善を試みることで主体的な児童を育成する一助になった。
- ・ペアや小グループでの活動を意図的に仕組むことで、自分の考えをもち、さらに広げたり深めたりする児童が多く見られるようになった。学びを深めていく過程が児童自身にも感じられる機会ともなった。
- ・学習会では、「問い返し発問」について具体的な例を挙げて話をしてもらい、とてもわかりやすかった。児童の思考を揺さぶることで数学的な考え方を深めることができることや別の視点から考えを見直させ、思考の幅を広げることができることを知り、その後の実践に生かすことができた。
- ・各学年の実態にあった実践を通して、学習の楽しさを実感し、自ら問題を解決していく学習過程を改めて考え授業改善に役立てることができた。また、研究授業もアクティブ・ラーニングの3つの視点にたつた授業を展開し、特に学び合いを大切にすることで学習内容の定着・発展につながっていたと考えられる。研究授業を行うにあたって、それぞれ資料を持ち寄ったり、試行錯誤を繰り返しながら教材を工夫したりすることで、ねらいに迫ることができた。
- ・ブロックでアタックシートを作成したことで、自分の学級について客観的に見ることができ、課題を把握することができた。また、その後課題解決のための具体的な対応策についても複数の教師の考えが知れ、とても参考になった。
- ・2回目のQ-Uでは、どの学級も満足群の児童が増えており、アタックシート作成も学級作りに有効に働いていたことが検証できた。

### 2 課題

- ・アタックシート作成に記載した取り組みが、どれくらい学級の子どもたちに有効であったのか、成果が少なかったのか、定期的に検証していくことでよりリレーションとルールを定着させることができる。
- ・来年度は、次期学習指導要領の移行期ということもあるので、外国語や道徳の指導法についての学習会を適宜設定していくことも必要だと感じる。

## III 成果物

- 1 研究授業，一人一実践の授業案
- 2 Q-Uアンケート結果，アタックシート

( 研究主任 鈴木 百合子 )